

## 協同組合を学ぶ

玉 真之介（徳島大学副理事〔COC+担当〕、生物資源産業学部教授）

全国大学生協連合会には教職員委員会という組織があり、2年に1度、全国教職員セミナーという集まりを開催している。2014年9月は、福島大学において「協同の原点に立ち返る」をテーマにセミナーを開催し、大学の教職員や生協職員など250名が参加した。そのシンポジウムの中で1人の報告者から衝撃的なデータが示された。それは、全労済協会が2011年に行った「協同組合と生活意識に関するアンケート」の調査結果である。

それによると、市民生協の組合員の内、自分たちが入っている組織を協同組合と思っている人は60.1%でしかなかった。また、一般の人たちは「協同組合をどのような団体だと思いますか」という問いに対して、「民間の営利団体のひとつである」という回答が43.5%と最も高かった。

このデータを示した大高研道氏（明治大学）は、協同組合が原則の一つとしている「教育、訓練および広報」が商品の宣伝など協同組合のメリットの広報中心になっているからではないかとして、「つながる」ことで得られる「基本的な信頼」に重きを置いた組合員教育、また、地域に自分たちを知らせる努力とともに、自分たちが地域を知る努力が重要ではないかと提言した。

このセミナーを受けて、教職員委員会は「協同組合教育と組織づくり」というプロジェクトチームを立ち上げ、協同組合教育という課題に取り組むことにした。その最初に取り組んだのは、「大学生協学生委員に読んでほしい協同組合論を学ぶリーディングリスト」の作成である。50以上の候補

から絞って、最終的に「予習」1、「基本編」4、「応用編」2のリストを作成した（全国大学生協連合会HP教職員のページ）。「予習」には、IYC記念全国協議会サイトの「協同組合とは？」を入れた。そして、「基本編」の最初に入れたのが、賀川豊彦の『協同組合の理論と実際』（コープ出版、2012）である。

それは、いま「協同組合の学び」を考えると、2つの意味で賀川豊彦に立ち返ることが重要であると考えたからである。1つは、新自由主義が社会にはびこり格差と貧困が広がっている今の時代が、賀川が活動を始めた時代と大きく重なり合うからである。もう一つは、協同組合の創設の段階で賀川が目指していたことが、まさに人と人との「つながり」を回復し、信頼し合える社会を創り出すことだったからである。

この認識に立って、プロジェクトチームは2016年9月に岡山市で開催した全国教職員セミナーでは、「協同組合論の学びを創る」という分科会で賀川豊彦研究者である兵庫教育大学の小南浩一氏に「賀川豊彦の経済哲学とその現代的意義」の報告をお願いした。そこで小南氏は、賀川が資本主義を超える新しい社会の構築として協同組合運動に取り組んでいたこと、そして賀川には「人間にとって経済とは何か？」という根源的な問いがあることを話された。

この年の11月にはBS朝日が「昭和偉人伝」で賀川豊彦を取り上げた。いま、この閉塞した時代のどこに希望があると言えるのか。同じような時代を生きた賀川の生きざまに立ち返ることが必要ではないか。